

ナカレ。格物ハ脩身・正心・誠意・致知ノ功ヲ包括セリ。」(大学解、全二、三四頁)と述べ、工夫に八條の等級があるとは認めず、一時一事の工夫の中に他の七事が包まれるとして「八條總括ノ工程唯格物ナルコト」(大学解、全二、三六頁)を説く。更に「八目ノ工程誠意ヲ主トス。而シテ意ヲ誠ニスル工程、即チ致知格物也」(大学考、全二、一三頁)、「意ハ萬欲百惡ノ淵源ナリ。…凡心ノ起發有善有惡ハ本心之裏面ニ意ノ伏藏アル故也。然レバ則ハチ惡念ハ意ノ伏藏ヨリ起發シテ本心ノ發見ニアラズ。」(大学考、全二、一四・五頁)と言つて、意が万欲百惡の淵源で、惡念は本心の裏面に伏藏している意から起發するとしている。

この「意」を「誠」にするためにはどうしたらよいのか。「格物致知ハ誠意ノ眼目」(大学考、全二、一六頁)「格致ノ外ニ更ニ誠意ノ工夫ナシ」(大学解、全二、四二頁)と言つて、「格物」の「物」を「五事」とし、「致知」を「良知に致る」と解して、「貌言視聽思の五事」を正すことにより吾が「本體の良知」を顕現させれば、「意」は「誠」になり、それは「明明徳」の状態だといふのである。蕃山は「物」を「コト」と読ませ、「意を誠にせんと欲する者は其知の本然の明をみがき出さんとす。天下の物事、五倫より尊きはなく、五事より要なるはなし」、「五事におゐて非心を格し非禮を戒むるを格物と云り。」と述べ、五事を正すのではなく五事において非心を正せとする。「心事元是一也」(岡田氏本年譜三十七歳)以前の「支離ノ病ヲ免レ」ざる状態ではないか。蕃山は「意は不常往來の念なり。無事の時は間慮となり、有事の時は雜慮となる。」と考え、

本心の裏面に意が伏藏するとはしない。

周知の如く藤樹の孝經テキストは「今文孝經」「古文孝經」等にも従わず、全篇を今文の十八章、古文の二十二章の章次を捨て、四つの問答体にした独自のテキストである。蕃山の「孝經小解」は藤樹の「孝經啓蒙」の本文を採用していることから、基本は師説によつてゐる事がわかる。「孝無終始」の解を蕃山は、「愛敬の心滅びたる義也。」としてゐる。「孝在混沌之中。而其生無始。…無時非孝也。…生生無終、…」(孝經啓蒙、全一、二七一頁)と説く藤樹とは相容れない。だが蕃山は「孝は太虚の神道」(孝經小解、全三、三頁)と解し、「身」も「立身は全人と成也。全人とは道器合一の身也。」(孝經小解、全三、四頁)として、「孝論・身体論」共に大略師説を継承していると思われる。

山崎闇斎と『日本書紀』神代卷

孫 傳玲

明暦三(一六六七)年の正月七日に、山崎闇斎は藤森神社を参拝した。藤森神社は、京都の南部にあり、『日本書紀』の編纂者である舍人親王をまつる神社である。彼は舍人親王の博識及び『日本書紀』編纂の態度を称えて、「親王強識出群倫、端拝廟前感慨頻、渺遠難知神代卷、心誠求去豈無因」(『垂加文集』(『闇斎全集』第一卷、一三頁)という漢詩を作った。渺遠として知り難き神代卷であるが、心を誠にして求め去らば、その深意を知ることができるだろう、と彼は考えており、ここには神代卷を理解しようとする彼の切実なる心持ちが窺える。

神代巻には日本の神道が示されている。仏教などの異端が移入するにつれて、日本にあるもとの道(真の神道)がだんだん埋もれていった。その道を再現するには、『神代巻』を理解することを通してでなければならない、と闇斎は考えていた。従って、彼は神代巻の研鑽に着手して、その真意の理解に取り組んだのである。

闇斎の神代巻研究は、主に三つの方面、即ち(一)訓点・附注、(二)講義筆記、(三)注釈書から考察できる。これに関しては、既に近藤啓吾や平重道、谷省吾、田尻祐一郎、などの研究者によって詳しく論じられている。特に西岡和彦氏が「垂加派の日本紀研究」(『国文学解釈と鑑賞』第六四巻三号、一九九九年三月)という論文で、闇斎の神代紀解釈の方法論や実践を明らかにしている。本発表では、これまでの先行研究を整理しながら、右記の三つの面から闇斎の神代巻研究の具体的な実践作業を考察してみたい。

まず、(一)訓点・附注についてであるが、跡部良顕の『垂加翁神説』(神道大系論説編十二『垂加神道 上』に所収)によれば、闇斎は神代巻を訓点して刊行したという。闇斎の訓点は「嘉点」と言い、有名な「道春点」と並んで、訓読史上の一画期をなすものであった。神代巻を訓点して新しく刊行しようと思ったのは、恐らく彼が当時流布していた版本に満足しなかったからであろう。そして、独自の訓点を施すことによって、自分なりの神代巻理解を示そうとしたのであろう。

次に、『神代巻講義』は、闇斎の神代巻に関する講義内容を、浅見綱斎が筆録したものである。現在『神代巻講義』の名があ

る伝本には四種が知られているが、その元となるのは、浅見綱斎の筆録本である(近藤啓吾「『神代巻記録』の改変」、同著『山崎闇斎の研究』神道史学会、一九八五年)。本講義では、「天人唯一」や「神の四化」、「心神」などの垂加神道の基本となる概念が全て説明されているため、本書は闇斎神道思想を理解する上での貴重資料である。

最後に、『神代巻風葉集』は、闇斎の神代巻に対する注釈書であり、『中臣祓風水草』と並んで、垂加神道の基本経典とされている。だが、『風水草』は闇斎の手によって完成されたのに対して、『風葉集』は未完成のまま闇斎が没した。首巻だけが闇斎生前の編纂であるが、その全体の完成はその後の門人によらなければならなかった。首巻を除く本文は、最初に若林強斎によって完成された。その後、また正親町家で一度編集なされたが、途中で断絶されたようである。現在一般に見られる出雲路家本は、最後に玉木正英の手で編集を加えて成書したものである(近藤啓吾「風葉集の完成と若林強斎」同著『山崎闇斎の研究』神道思想学会、一九八五年、磯前順一「新発見された山崎闇斎『風葉集』」(磯前順一・小倉慈司編『近世朝廷と垂加神道』ぺりかん社、二〇〇五年)。

以上のように行われた闇斎の神代巻研究の原動力となったのは、神代巻から日本の真の道を見出そうとすることであり、またそれが研究の最終目的でもあった。